
とある悪魔の確率変動【チャンスメイク】

シュマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある悪魔の確率変動【チャンスメイク】

【Nコード】

N9342T

【作者名】

シュマ

【あらすじ】

確率を変動させることができる能力者は
自分の死ぬ日を知ってしまう
でもそんなに気にしないで過ごす学園生活です

あと佐天さんカワイイ

死ぬ十日前から一週間前

皆さん、こんにちわ。学園都市十九学区在住、百日 ももかといっています。現在、17歳健全な高校三年生をしています。

当然ですが、僕は七月二十八日に死ぬみたいです。事故か病気が、自然死かは知りませんが、確定です。

そんなことより世の中すごい人がいるものです。学園にすむ超能力者の頂点であるレベル5、その第三位と渡り合える人がいるなんて驚きですよ。あの超電磁砲の攻撃が避けられたり、防がれたりしてるんですから。

今日は七月十八日、あと十日なにをして過ごそうかな？まず散財しよう、江戸っ子は宵越しの金は持たないんだよと今日の予定を、大まかに決めて街をぶらつく、ちなみに近所ではなくちよつと遠出してみた。

「ふ、不幸だ——！！」

「ツンツン頭は元気だなー。」

見た目不良な僕が街をふらついていると、目の前にツンツンした髪を持ち主、つい先日、レベル5の超能力者、超電磁砲レベルガンと（超能力を使って）遊んでいた男だ。

ツンツン頭が元氣よく不幸を嘆いているので、気になって近寄ってみると……どうやら犬の糞に携帯を落としてしまったみたい、これは可哀そうだ。

ツンツン頭は携帯をつまんで近くの店内に入っていった。たぶん携帯をトイレで洗うのだろう、それにしてもこの学園で犬の糞が落ちてる可能性なんて、1、4%しかないのに……あ、掃除ロボットだ。

さてどこに行こうか、この店は。

「セブンスミストか、うーんここはなんというか普通だからな。品物も安価だし散財には向いてないな、他の店に行くかな。」

それに危ないしね、爆破事件が起こる可能性が67%もあるし、近くの高級店でなにか探そうつと……。

んん？外が騒がしいな、折角ミリタリーショップで面白いものを見つけたのに、何かあったのかな？おおお、お？

「みなさん離れてください！」

風紀委員が避難誘導してるな、えーと爆弾が爆発する確率が92%か、やっぱり起きたみたいだね。虚空爆弾事件、噂では量子変速という能力を用いてアルミを爆弾にするらしいけど……けっこ
う危ないね。

誰かが怪我しないように、なんとかしよう！僕の能力で・・・
なんてね、あったらいいなヒーローみたいな直接人を助ける能力が、
でも僕ができるのはせいぜい人知れず、こっそりやっ——

「爆発したぞっ！」

「中の人たちはっ！？」

「無事だっ！全員怪我一つない！」

爆風で飛んだ飛来物で誰も怪我しない確率を99%に引き上げる
だけ、もつと派手な能力が良かったな。いやすごい便利だけどね、
チャンスメイク
僕の確率変動。

ツンツン頭も超電磁砲とかも怪我がなくて、よかったね。なんか
忙しそうだけど、僕は買いた物があるから、機会があったら話しかけ
よつと。見覚えがある奴がいるけど、こっちは店内だしばれないよ
な。たかられるのは勘弁してほしいや。

「店員さん、その双眼鏡とあのガスガンとその弾ちょうだい。」

「え、ああ、にいちちゃん。落ち着いてるね、向かいが爆発したの
に・・・。」

「まあ、学園ならよくあることですしね。」

「そうかい？」

くふふ、いい買い物をしたな。じゃあ、次はどこに行こうかな？
おなかすいたし、飲食店にしよう。それでうんと高いものを食べよう。

++++

七月十九日、夏休み前日です。学校が終わり放課後、クラスメイ
トとカラオケをした帰り、超電磁砲を見つけました。何してるんで
しょうね、あの人はスキルアウトと話してるし……。あの演
技はないわ！。

「し、白井さん！」

今日のファミレスは一段と騒がしいな、巻き込まれないように確
率変動しておこうか。巻き込まれる確率26%を0.01%にして
と、これで大丈夫、確実に厄介ことは他人が請け負ってくれるはず

「その子、嫌がつてるじゃないですか」

あつ、ツンツン頭だ。最近よく見るこいつは常に100%の確率で動く、この学園で唯一確率変動できない人物。それで何で効かないのかずっと気になっているんだが、どうも間が悪いようで、見るたび見るたび騒動を巻き込まれているため、ただの一般生徒の僕には話しかけるなんてことは出来なかった。

「あはは、失礼しました！」

僕の確率変動は、^{チャンスメイク}僕が知覚できる今起こり得る事象に干渉し、その事象が起こる確率を変動させることができる。

例えば、宝くじで一等が当たる確率を上げると確実に当たったり、サイコロを振って確実に狙った目が出せるということだ。

でもこの素晴らしい能力にもデメリットがあつて、もう起こってしまったことや僕が知覚できる範囲を超えた事象、やがて来る死とツンツン頭のように100%の確率で起こることは確率変動することができない。

「だからツンツン頭君、頑張つて生き延びてくれ。」

僕にはどうすることもできないんだ、

++++

七月二十日、朝っぱらからある女の子からメールが来た。内容はこうだ

『ももかちゃん！^{レベルアップ}幻想御手をゲットしたよ！羨ましいだらっ！』

女の子の名前は佐天涙子、本当に去年まで小学生だったのかというナイスバディの持ち主だ。やはり恐るべきはムサシノ牛乳だな。

そもそも彼女、佐天涙子。涙子ちゃんとおったのは全くの偶然である。僕が運営しているサイト、【無能力者の集い】というレベル0達の掲示板に彼女が来たのが始まりだ。

小学生の涙子ちゃんがどうしたらレベルを上げれるのかと聞いてきたので、皆で実体験やらアドバイスをしていたところに明らかに体目的の奴が話に入ってきて、涙子ちゃんと会う話になったらいいらしいというのはそのスレにいた人が管理人である僕にメールで教えてくれたからだ。

メールを受けた僕は掲示板の規則（オフ禁止、ときどき湧く変なのは無視、荒らさない等）を破ってる涙子ちゃんが危なく感じた。

それで僕が待ち合わせ場所に、急行し、大事には至らなかったけど、いやほんとに間に合ってよかった。僕の能力で涙子ちゃんに9%会えるという確率変動にすることで、ぎりぎりだったけど助けることができた。

それで涙子ちゃんに初めてあったときの涙子ちゃんの第一声が

「ひい！あ、あなたが私のレベルを上げてくれるんですか？」

だった。掲示板の管理人というのを明かして、相手がどういうやつだったのか。二人で観察して、アンチスキルに連絡したものだ。昔話はこの辺でいいだろう、涙子ちゃんに返事をださないよね。

『それ使っちなよ、うちの掲示板で意識が無くなるって報告上がってるから。』

よし、二度寝しよう。まだ3時だし、夏休みは怠惰に過ごすのが学生の本分だからな。決して『pppp』涙子ちゃんからの電話から逃げているわけではない。

メールから6時間くらいで

「ジャツジメントですの、お話聞かせて貰えますでしょうか。」

なんか変なの湧いた、ツインテールのお嬢様言葉でちょっと笑顔の怖い御嬢さんがオレの部屋のソファに座ってます。

僕は布団からノロノロと出て、着替えはじめる。彼女を無視して

「ちょっとあなた！私がいるのに着替えますの！？大体なんで裸なんですか！」

僕、寝るときは裸なんだ。あとそれに勝手に住居侵入してくる人はレディとは認めないし、ここワンルーム（18畳だけ）だし、たってるのだって生理現象だし、なにより涙子ちゃんたちがドアをずっとノックしててうるさいからね。

「いらつしやい、涙子ちゃん。その子はお友達かな、なにか飲む？」「無視しないでくださいまし！」

「おつす！ももかちゃん、元気してるう！というか、朝のはなんなのよ！私、あそこの常連なのに知らなかったんだけど！」

「相変わらず元気だねー、牛乳飲む？ムサシノ牛乳特濃4 / 5レアじゃね。」「聞いてますの！」

「牛乳！4 / 5！牛乳4 / 5ってつられるかああ！いったじゃんかあ、一緒にレベルアップしよって、私のエアロハンドでスカートめくりだっついてたってじゃんかあ。」

物で釣れなかったか、もう少しだと思ったんだがな。ならば奥の手だ。

「冷蔵庫に一日三十個限定源蔵プレミアムロールケーキが「さっすがももちゃん！ささ、いただきますしょう！」ふっ、ちよろいもんだ。」

三人分用意してソファに座る、涙子ちゃんとお友達？はテーブルの前のクッションに座った。折角ならソファに座ればいいのにと、僕の隣の女の子を見る。三人掛けのソファにふんぞり返って座ったこの子は、一体何なのだろうか？

涙子ちゃんの友達でもないのに、家宅侵入してきたこいつは、僕の分のロールケーキをばくついている。どうやら食い意地の張った人物のようだ。しかしその表情はなんだか、複雑そうだ。

「まるでバナナを取られたゴリラだね」

「・・・喧嘩売ってますの！？」

「涙子ちゃん、涙子ちゃん。何しに来たの？」「また無視ですよ！？」

彼女はカルシウムが足りないようだ、牛乳をおかわりしてもらおう、（一部の）体の成長にも有効だからな。個人的には、どんどん飲んでほしい。

そしてこちらを見ては顔を伏せる涙子ちゃんのお友達、一体何なのだろう？確かに僕は偽装不良ではあるが顔つき自体は、普遍的な

はずだ。

「んーと、こっちが初春でそっちが白井さん、二人ともジャッジメントなのさ。んでね、今幻想射手の捜査をしていて、朝のメールの話をしたら白井さんが今すぐ聞きに行こうといいだして、今に至る。」

「なんだ最初からそう言えればいいのに」

「貴方が意味不明なことをしだすからでしょうが！！」

一体何のことやら？やれやれ初春さんが時間を気にしているからここまでにしといて上げようか。何か用事がありそうだしね。

「それじゃ、さつさと僕がしつてることを話しましょうか。この情報は不確かなものだから、鵜呑みにしないでくださいね。現在、僕の運営する掲示板には多数の有志からの報告が上がってきています。この報告はアンチスキルに通報するものです。」

「幻想御手は昔から噂が上がっていました。そして問題が表面化したのが最近、七月に入る頃です。スキルアウトにより幻想御手の売買が行われ、幻想御手がネットに流れ多くの人が入手できるようになりました。僕のところ^{くしろ}に具体的な報告が初めて上がったのは、僕の掲示板の常連であつた^{かたひら}釧路帷子さんが、幻想射手を使用したのでは？という話です。」

「レベル3であつた釧路さんが、急にレベル4になり、七月十日昏睡状態に、そして病院に入院をします。ほかにも報告が上がりますが、いずれも似たようなものです。」

「有志によると、幻想御手は共感性を利用した。脳の波長のチューニングだそうです。その有志は今頃病院にいますが、これ以上は脳科学者に聞くのがいいでしょう。」

「次に幻想射手の売買を行っているスキルアウトの報告ですが、主に一〇学区、一一学区——」

一時間後

「——とことです。って二人は？」

「ん、帰ったよー。ももかちゃんの話長いんだもん」

はていつ帰ったんだろうか？あと涙子ちゃんは何でここにいるんだろうね。折角、僕が分かってるスキルアウト達の居場所とそれぞれのグループの話をしようと思ったのにな。

うーん、つい癖で人に語りなくなる悪癖があるにしても少し喋りすぎだな。

「涙子ちゃんはなんているの？」

「風紀委員じゃないから置いてかれちゃった。幻想射手も没収されちゃったし……。そうだ！ももかちゃん、どっか遊びに行こうよ！」

「別にいいけど、やだからね前みたいにランジェリーショップに連れてかれるのは、また同級生に会うかもしれないからね。」

今日は涙子ちゃんと買い物をする事になった。まあ、いつもどおりの学園だったと言っておこう。

死ぬ十日前から一週間前（後書き）

これを書くきっかけになったのはこんなコピーでした。でもコピーと違い、うちの百日は銃を撃たれたら普通に死にます

以下コピー

レベル1を装って学園に潜入しているスパイ 本来のレベルはレベル0（ミツシング級）

能力は確率変動 ゴッドタイス 半径約2kmの確立を自由に操作できる（0%と100%は変更不可能）

武器は不止魔弾（直光の断軌）を打ち込むガラム・ア・ゼルフォン銃の腕はまったく駄目だが当たる確立が0.000000001%でもあれば確立操作で100%当たる

科学、魔術とも頭の中で思考、計算してから発動するタイプの能力は、

計算が0.000000001%でも外れる可能性があれば計算を間違ひ、

発動失敗する可能性が0.000000001%でもあれば不発に終わる

彼を倒すには100%発動して100%命中して100%息の根を止める方法で無いと無理である

騒ぎの外から

《七月二十一日》

昨日の別れ間際に涙子ちゃんは幻想御手のことを聞いてきた。

『幻想御手が……。あのとき使ってれば、私もレベルが上がってたのかな？』

『僕のサイトには学者崩れが常駐してるけど、そいつらに言わせるとレベルが上がっていた確率は非常に高いと思う。レベル5などの超能力者はいふなれば、高性能なスパコンだね。対して幻想御手はクラウド方式を使ってるPC。』

『クラウド方式……。？』

『知らないかな？一つの処理作業を多くの数のPCで処理する方式なんだけど、これを使えばその辺のPCでもスパコンを超える処理速度になるんだよ。つまり幻想射手は、他人に自分の応力の演算を補助してもらって、その結果自分の処理能力を超える超能力を使うことができるみたいだよ。』

『うーん、私にはよく分かんないかな。まあ、いざとなったらももかちゃんが何とかしてくれるよね、あの時みたいになさ。』

『あのときから涙子ちゃんは無鉄砲で困る』

涙子ちゃんは笑って、家に帰って行った、服の入った大袋を持つ

て。

「ふう、昨日は疲れたな。今日はうちに引きこもって、情報収集に励むとするかな。気になることもあるし」

カチカチとマウスを鳴らしながらネットの海をサーフィン、朝からネットとかダメ人間だなー。ブラウザを複数展開して知りたいことを探していく。それに並行して自身の確率を変動させて、望んだ情報を持つ人が『無能力者の集い』に来るように、仕向ける。

昨日の情報もこうして確率を変動させた賜物である。

「妙な連中もいたものだね、高レベルもしくは応用性に長けた能力者。」

不思議なこともあるもんだ、そいつらのほとんどが高校生、連中同士で群れる傾向がある。しかし群れたグループごとに対立しているようで、少し前にもアンチスキルに捕まった奴らが多々いる。

なんでだろうね？同じ境遇のはずなのに、グループごとに全く違う考えをして潰しあうなんてね。

逆に群れていない奴は、ジャッジメントにいるか、特定の人物に接触経験があるようだ。たとえば超電磁砲だ、彼女にはストーカー紛いの人もいるらしい、そしてツンツン頭だな。彼の周りには力を隠しているも含めても、異様ほどの人が接触している。おかしいことに、ただの学校に複数のレベル3や4が所属している。

「またの名をトリッパー、この学園都市を小説や漫画の中の世界という連中。死んで転生したとか、違う世界から来たとかなんだか言われてるけど。そんなことより、はた迷惑なんだよな。」

涙子ちゃんの周りにもそれらしき人がいるし、僕のクラスにもいる。……彼女はこのこと知らないと思うけど、僕のサイトに入り浸って、僕が悩みを聞いてあげてるからバレバレだね。

彼女によるとほかにトリッパーがいたことすら知らないから、トリッパーに横のつながりはないみたいだ、それに彼女はなんだか分からないうちに、学園にいたとか。

分類してみると、？違う世界から来た連中（スキルアウトや一般生徒に多い）。

？転生した連中（スキルアウト、一般生徒、ジャッジメント）。
？転生者の中でここを創作の世界という連中（特定の人物の近く、スキルアウト、一般生徒、ジャッジメント）の三つに分けられる。

比率としては？>？>？>？くらいかな、さっきの彼女、釧路帷子さんは？だね。

「よそでやって欲しいもんだ。」

ひと息ついて時計を見るもう日が沈む時間だ。

PCの前から立ち上がり、台所へ向かう。床に落ちている雑誌を拾い、布団へ放り投げ、雑然とした部屋を歩く。冷蔵庫の前に行き、中にある牛乳を取り出す。

牛乳は軽かった、中身はほとんど入ってなくて、仕方なしに水道の水を飲む。

「マズ・・・。」

まだ寝るには早いが、なんとなくやる気の無くなった僕はそのまま布団に潜り込んだ。物の落ちる音がしたあと、次第にうつうつとして眠りに落ちていった。

++++

七月二十二日、そういえば涙子ちゃんの様子が変わったことにいまさら気づく、ちょっと気になり、確率をもてくり会いに行くことにする。

学区をまたぎ気ままにバスに揺られ、当てもなく移動する。僕の確率は確実にあたるけど、正確性を欠くのがたまにきずだ。

普通に涙子ちゃんに連絡して会うことも考えたが、別に話すこともないの遠目から様子を見ることにした。

「なにやってんだ、あいつらは……。」

遠目から見ると能力を使って遊び？（練習とも言えなくもない）をしている涙子ちゃんとその他、確か皆レベル0か1だったと思うけど、ああ。幻想御手か。

折角、忠告したのにね。まあ、涙子ちゃんの怪我しない確率は常に変動させてるから、そんなに心配してないけどね。それにしても嬉しそうだね、涙子ちゃんは本当に無鉄砲だな。

「やつちゃダメって言われるとやりたくなるのが、人のサガだしね。」

さてと僕にできることは、少ないな。万が一が起らないように、予防するかな。下手に動かれたら、解決する人たちが動きずらいだろうしね。無事に解決するように、変動させないと。

幻想射手を使用して、昏睡するまでの期間は平均2日〜一週間。涙子ちゃんが今日中に昏睡する確率は100%。

「アケミ!？」

+++++

七月二十三日、幻想御手の関連事件の事態が動き始めたようだ。
大脳生理学者木山

春生の研究所に踏み込み、木山春生を拘束しようとするも、返り討ちにあい、さらに木山の研究所は余波で崩壊し、幻想御手の患者の救済策を失う。

「一応、涙子ちゃんを元に戻す方法を得ないとな。木山の方は誰かが、なんとかすると思う、それに学園も黙ってないからね。」

涙子ちゃんを元に戻す、方法は三つ。木山が創っていたかもしれないワクチンプログラムの入手、幻想御手を解析してワクチンプログラムを作成、最後は既存の音楽から幻想射手のワクチンとなる部分を取り出し構成する。

一つ目の木山が作成したワクチンプログラムは、もともとない可能性、木山がどこかに隠している可能性、誰かの手に渡っている可能性、もう破損している可能性、さまざまに僕には入手が難しい、第一木山に近づかないと入手はほぼ無理で危険だ。

二つ目は僕には無理の一言だ。三つ目、これしかないな。共感性で脳波を一定にできたのなら、逆に戻すことも不可能ではないはず……かな？

「まずはワクチンとなる確率が高い音楽の入手だな。」

こうしてる間にも、事態は急変している。現在、木山と超電磁砲、知らないやつと第七位やらさまざまな人物が交戦しているようだ。木山と協力するもの、木山を止めようとする超電磁砲とトリッパ―である第七位、騒ぎに便乗して暴れるものや鎮圧しようとするアンチスキルなどの治安維持勢力。

やはり中心人物は木山と超電磁砲か・・・なんとかならないものか？超電磁砲が木山に勝つ確率は67%、純粋な戦力なら超電磁砲が圧倒的だが、あくまで止めたい彼女と目的のためなら死すらいとわない木山、それに他にも影響する因子があるからな。どう転がるか・・・。

「該当曲は全部で147曲・・・一曲そのままワクチンなら楽なんだけど。」

ワクチンとなる音は曲によって数秒〜数十秒、ツギハギしながら地道にするしかないな。能力で解答が解っていても骨が折れる作業だ、これで完成した直後に事件終了とかだったら、シヨックだな。

また事態が動いたようだ、なんとか木山を倒し、騒いでいた連中を鎮圧したが、謎の怪獣が現れて街中を暴れているそうだ。頑張れ超電磁砲、君なら何とかなるよ、多分。

「ジャスト6分のワクチンが完成、ワクチンである確率は99%・・・できたけどどうしようか？コピーはアンチスキルとかジャッジメントに送っておこう、必要かもしれないし、僕は涙子ちゃんのところに行くかな。」

さてとパクツたジャツジメントの腕章を着けてと、んー今は交通規制されてそうだけど、バスとかは止まってるかもだから原チャリでいくかな。

やっぱり騒ぎのあるほうは道路が封鎖されてて通れないな、路地を通って涙子ちゃんの病院まで遠回りして――

『――！！！！！！』

乱雑にツギハギされた音楽が、流れ始めた。なにこれ新手の拷問ですか？・・・・・・これ僕が作ったのか、結局ワクチンプログラムは僕のしかなかったのかな。まあ、確率・・・・大分低かったからね。

木山のワクチンは4%、解析して作られるワクチンは2%だから手元にあるのに、かけてみたのかな？でももしこれが幻想射手の曲だったら、大惨事だったね。230万人分のAIM拡散力場の結晶、人の手に負えるもんじゃないね。

なんて自己逃避したけど、これってもう涙子ちゃん起きてるよね？

「お見舞いはまた今度にするかな。」

面倒なことになるみたいだからな。

++++

七月二十四日、幻想御手事件主犯木山春生拘留、共謀者はいまだ捕まらずか。新聞の一面になるくらい大きなことになってたのか。

今俺は外に出て、事件の被害状況とかを見に来た。

「どうもありがとうございます。ステイル、行くぞ」

「・・・ああ。」

そしたらツンツン頭を探す（学園でも浮いた服装の）二人に知らないかと聞かれたので、素直に能力を使って確率の高い場所を教えてあげた。

最近11次元の演算をすることで、自分の見えない事象の確率を求めることができるようになったのだけど、これって自分の死を予測できたから能力が成長したのかな？

今までは生活に（すごく）役立つくらいのレベル3（強能力者）

で、さらに演算能力が上がった気がするから、レベル4（大能力者）くらいはあるような気がする。やりようによっては他の能力者を圧倒できるから、この考えはあっていると思うんだけどね。

「でも僕の実験判定は無能力者、僕のAIM拡散力場は観測されたことがない、でも僕は能力を使っている実感がある。」

ということは計測できないくらい微量なのか、そもそも観測できないのかもしれないな。んー、どういうことなんだろう？分らないな、自分のことなのに。しょうがないな公園に行つて。

「今日一日は能力の実験でもするかな。」

最初に僕がこの能力を認識したのは隣に座っていた女の子のスカーツの中を見ようと消しゴムをわざと落としたときだった。あのときは僕が大人たちから無能力者のレッテルを貼られた数年後で、小学校に入る前だった僕は、多少落ち込んだりしたけどそれほど気にしなかった。

それは僕が置き去り（チャイルドエラー）だったからだ、周りには僕と同じように無能力者がいて、わざわざ自分を卑下することがなかった。皆とおんなじだったから。

「確か消しゴムが狙い通りに落ちる確率が演算出来たんだっただけ。」

あの時、僕だけが能力を行使できた。周りと違うことを恐れた僕は、なるべく能力を使わないで今まで過ごしてきた。

だから能力の実験なんて初めてだ、人間は死を悟ると吹っ切れるもんなんだと今実感したよ。

騒ぎの外から（後書き）

主人公のツンツン頭、超電磁砲にも面識ないけど
流れに影響を与えるうちの子
んで幻想射手事件は他岸の火事のように
関心なくおわりました

他視点はひどいことになっていますがね

熱情の律動

七月二十七日

5時か・・・朝から妙に目が冴えて今から眠れそうにない。明日、二十八日は僕が死ぬ予測が出ている。

そう思うだけで、背中から嫌な汗が伝う、手のひらも汗ばんでいる。じつと布団の汚れ、多分よだれの跡を見る。夢見はそんなに悪くなかった、むしろちょっとエロくていい感じだったな。

「くふっくふふ、今日はいいい日になりそうだ！」

シーツを剥いで、むき出しの布団をたたんで、押し入れにしまう。この大きなワンルームに普通の大きさの押し入れでは少々物足りないな、一面全部収納とかどうだろうか？

シーツと寝間着を洗濯機に入れる、全自動万歳と言っておこつ。その足で洗面台にいき、顔を洗う。

「限一つないな、至って健康的な肌だ・・・ほくろが増えてる？」

歯を磨かないとな、白い歯は一日でならずだ。歯を磨きながら適

当にテレビをつける。

『マジカルパワードカナッ』 『幻想射手じけっ』 『今日の天気予報です。』

ピッピッピと天気予報でいいか、ふーん学園全体で晴れなのか。

「ガイアがオレに外に出ると言っている。」

ふふ、今日の僕は少々テンションがおかしいらしい、今なら超電磁砲のスカートでさえめくってしまうかもしれないな。ぐえっ、齒磨き粉飲んじやった。

さて朝食を済ませて、洗濯も終わってしまった。もはや外に出るしかあるまい！腕時計のアラームを今日の24時に設定して、いざ外に。

「今は6時か、まだコンビニしかやってないな。ふふ、いいでしょう今日の僕はいつもの僕とは違います。リミッター解除ですから！！」

とはいってもすることはいつも通り街をブラブラするしかないけど、もちろん19学区から出てな。それにしても最近はポルターガイストの本場が変わってしまったみたいだ。一体何が原因なんだろうな？もしかして幽霊が本当にいるのかな。

コンビニ店員の嫌そうな視線を感じながらの立ち読みはやめられないな。・・・ほむほむここで引きか、うぬぬ先が気になってしょうがない！

「ふう、なんとか今日中に完結しないものだろうか？」

「それはありえませんがミサカは断言します。」

今は10時か・・・4時間も立ち読みしてたことになるのか、さて何を買おうかな？今日中に全財産（60万）を散財したいところだな。パーツと買い物でもするか。

「まさか無視されるとはミサカは驚愕します」

「ふむ、ときに少女よ、おなかは減ってないか？」

「ナンパですか？ミサカは期待します」

「ファミレスでいいか」

「この人は話を聞きませんミサカは理解します」

この子は何だろうかと百日は考えますってか？しかし不思議というか変なこだな、超電磁砲に瓜二つで、服装も同じ常盤台の制服か。

違いといえばゴーストに死んだ魚の目をしてるくらいか？まあいいか、それよりこの子にもお金の使い方の案を考えて貰わないとな

「すみません、お客様。只今満席でして・・・相席でよろしければありますが、どういたしますか？」

「相席でもいいのではと実はおなかペコペコなミサカは貴方を説得します」

「じゃあそれで」

「それではあそこの方のところが空いていますので」

店員にさされたところには白髪頭の色白い男が一人、コーヒーを飲んでいた。あれっでもしかして・・・いやいやないないこんなところにレベル5がそうそういるはずがない。

「あ？」

「どうもミサカは待ちきれずにメニューを開きます」

「こんにちわ、僕は何を食べようかな。やっぱり納豆キムチカレー？」

「おい！」

なんだろうか、嫌な予感しかないな。この人、この子の知り合いなのかな？念のため能力で、確率を変動させないかね。

「そんなものがあるのですか？とミサカは聞きます」

「ああ、わりとうまいぞ」

「無視か、テメエ」

「知り合いなの？」

「いえ、初対面ですとミサカは即答します」

「この野郎・・・！！」

あ、ヤバいこの人、アクセラレータ一方通行である確率が100%だ。学園最強のレベル5に喧嘩売ってるよ。この状況・・・もしかして死んだ？いやいや死ぬのは明日だから今日は大丈夫なはず・・・うんきつとそうに違いないな。

「一方通行さん、落ち着いて」

「そうですよと一方通行を宥めます」

「テメエーラ俺を知っててその態度か！もういいぶつ殺す！」

「まあまあ落ち着いてください。ここにサイコロがありますね、このサイコロには種も仕掛けもないんですけど。絶対に僕が言った

目が出るんですよ、はいどうぞ。出る目は“3”です。」

「いたっ!？」

「ふざけんな!馬鹿にしてんの……3だと!？」

僕が一方通行に投げたサイコロは彼の能力に弾かれ、隣の子にあたった後、彼の足元に転がっていった。出た目は3、しっかりとその動きを目で追っていた彼は驚きで動きを止める。

僕はサイコロを拾いテーブルの上に転がす。出た目は“3”宣言した目と同じ、2回、3回と転がしても“3”しか出ない。

「なにかの能力でしょうか?とミサカは考えます」

「一方通行さん、あなたの手で“3”以外の目が出るように置いてくれませんか？」

彼の目は真剣にサイコロを観察している。彼の脳は先ほどの事象に違和感を覚えなかった。だからこそ沈黙している。

一方通行はサイコロを手に取り、3の裏面の4を表に置こうとした。が置く途中で手が滑ったのか、サイコロは転がり出た目は“3” 僕が宣言した通りだ。

「面白いでしょう?僕的能力は」

「風ではない・・・念動系？とミサカは推測します。」

「違う・・・・・・・・それだったら俺の反射で・・・偶然か？」

「いいえ必然ですよ、一方通行さん。あなたが3を表に置いてなかったら手は滑らなかつたでしょうね。」

一方通行は顔に手をやり、深く考え込んでいる。隣の超電磁砲似の子は、3しか出ないサイコロを転がし続けている。僕はメニューを聞きに来た店員に注文することに。

「少女よ、なにを食べるか決まった？」

「ミラノ風ドリアに食後にはジャンボパフェが食べたいとミサカは要求します」

「そうかい、僕はフカヒレカレーに杏仁豆腐を」

「かしこまりました！」

一方通行の方をちらちらみる店員は急いで厨房にいつてしまった。大方一方通行の友達かなんかだと思われたんじゃないだろうか。

そういえば彼女の名前というか自己紹介をしてなかったな。

「僕は百日、君の名前は？」

「そんなことよりサイコロの方が気になりますとミサカ20000号は主張します」

「お前ら・・・相手の名前も知らなかったのかよ」

一方通行は頭イテえと洩らしたつきり、呆れた顔をしてどこか遠い目をしだした。はて見覚えがあるな・・・そうか、僕と初対面の人は大体こんな顔をしていたな。例外は涙子ちゃんとミサカちゃんくらいかな？

さて大急ぎで料理を持ってくる店員から、今日の昼飯を貰うとするかな。

「3以外が出たとミサカは報告します」

「食つてるときまで能力を使わないよ。ミサカちゃん、さっさと食べないと冷めちゃうよ。」

「こ、孔明の罠とミサカはサイコロを睨みます」

「孔明も大変だねって一方通行さん、帰っちゃうの？」

「・・・・・・はあ・・・・。」

僕が喰い終わりそうになった頃に、復帰した一方通行はため息をはいて出ていった。金払わないで出ていったけど、もしかして僕の

奢りなんだろうか？別にいいけどね。

隣では無表情にドリアを食べるミサカちゃん、視線はサイコロに釘付けのようだ。あれが彼女の何を惹きつけているだろうか、よく考えたらミサカ200000号つてすごい名前だ。ミサカちゃんが少なくとも20,000人、超電磁砲も合わせて20,001人・・・もしかしたら100,000人くらいいるかもしれないな。

「一家に1ミサカちゃん・・・ありだな。」

「1人18万円ですがいかがでしょうか？」とミサカは半分本気で冗談をいいます」

「お買い得だな、なら1人買うよ。予約ってできるの？」

「現金で一括払いならミサカはドキドキと胸を躍らせて答えます。」

「じゃあはい。18万、ああここは僕が払っておくからゆっくりパフェと格闘していいよ。」

「ももかは馬鹿ですねとミサカは馬鹿にします。」

「はいはい、さようなら。」

ミサカちゃんを置いて店を出る。ミサカちゃんといってもよかったのだけど、あの子といて一緒に死んだりしたら可哀そうだからね。

さて残り41万か、どうやって散財しようかな？・・・そうだと！ツンツン頭くんにあげてしまおう。うん、それがいい、なにせいつも不幸不幸いつてるからこれくらいの幸せをあげたら面白いことになると思うからね。

例えばあげたとたんに燃え上がったたり、家が火事になったり、なにかしらの不幸に見舞われるに違いない。

そしてツンツン頭君の家についたんだけど、すでに燃えた後だった。全焼・・・ププツ全部燃えてるし、我慢できない。

「アッハッハッハハハ！！燃えとるやないかい！！」

一通り笑った僕は40万を封筒に入れて、彼のポストに入れておいた。

ツンツン頭の家に寄った後、また街をブラブラして気が付いたら恐ろしいブツを見つけてしまった。あの一方通行よりも恐ろしいこれを僕は思わず衝動買いしてしまった。まさかの80%オフ、買うしかない否買わなくていけないという強迫観念から手にしたそれはまさに究極の一品であった。

「ゲテモノメイドシリーズ・・・完成していたのか！」

純イギリス製の純中華メイド服、その名も龍神チャイナメイドである。見た目を構成する要素からメイド要素のほとんどを取り除きよりエロさに執着した一品、深すぎるスリット、胸の谷間からヘソまでぽっかりと空いた大きな隙間、そこから胸が零れ落ちないようにどんな体系でも着れるように改良された紐網、伝えきれないエロさ……服だけでエロい、できることなら誰かに着せたい！

『pppp』

「くっ！28日になってしまったか！僕はこれを誰かに着せるまで死ねないんだ！」

誰か！誰かいないのか！？くそっ！酔っ払いじゃないじゃないか！どこかにグラマーなお姉さんとかいないのか！？

「そこの君！学生ですよ？学生はもうとっくにおうちに帰る時間なのですよ。」

小学生！？僕はこんな子供にしか会えないのか！？神よ……あなたは僕にロリコンになれとおっしゃっているのですね。分かりました、あなたを信じます。

「あの！うつ！？」

急に風が・・・もしや神はこれを着せるなど言っているのか！？
天使の羽まで見える。分かりました、僕はこれを着ます。この服は
今日死にいく僕に最後のプレゼントなんですね。ああ、羽が僕の胸
に・・・・。

「神よ・・・私はッゴフウー!!」

「ギャーー!!」

「お、幼子にこんなものを見せるなんて・・・神様のいけず・・・」

「きゅ、救急車呼ばないと」

どこの誰だか知りませんが、迷惑かけます。葬式はしなくていい
です。できればさっきまでの僕は消し去りたいです、それではおや
すみなさい。

熱情の律動（後書き）

やっぱりとある系ならこれくらいキャラが濃くないと
主人公でも影薄くなりますからね

というわけではっちゃける主人公でした

悪魔生誕

【^{ももか}百日姓なし男性17歳。経歴、推定0歳でチャイルドエラーとして孤児院に入ると同時に霧ヶ丘付属第4研究所の特殊脳波移植計画^{イシ}の被験者となる。現在は高校に通い、第19学区に居住している。・・・ですか。

「あら初春さん何見てるの？」

「ああ、御坂さん。この前の幻想御手のワクチンの出どころのIPアドレスを抜いたんですけど、どうも佐天さんの知り合いの人だったみたいで、今書庫で調べたところなんですよ。」

「佐天さんの知り合いって・・・ゲッこの方は・・・。」

「黒子知ってるの？」

「ええ、まあ、あまり気持ちのいい人ではないですね。」

「あれは白井さんも悪いと思いますよ。」

きょんとした御坂さんに、嫌そうに顔を歪める白井さん。今、私は177支部で先日あった幻想御手事件をまとめているところでした。

突如幻想御手のワクチンプログラム、いえワクチンとなる音楽デ

「タが私の手元に届いたのは、AIMバーストが現れて対抗策が無いことに気づいたときでした。あのとき私たちは既に木山さんの持つワクチンが戦闘で壊れたことを知り、何か手段はないかと必死だった。」

そんなときに届いた一通の『現実の贈り物』^{アラーム}という音楽ファイルにかけてみました。実際、今になって思えばなんて恐ろしいことをしたのかと自分を問い詰めたいところです。

「ワクチンを造った人が……どんな人なの？」

「そうですね。飄々としていて、人を喰ったような人です。私たちが掴んでいなかったことを百日さんは既知のものとして分析していましたね。情報収集能力に長けているようです。」

「ええ本当に呆れるくらい、飄々としていますわ！」

ぎりぎりと歯を食いしばる白井さん、よほど百日さんのことが嫌いなようです。御坂さんにいい寄る人たちよりも気に食わないようですね。

「それですね。百日さんのサイトの管理人用パスを開けて、メール内容を見たんですけど、どうやら私たちが百日さんの家に行く一週間前にはもう幻想御手の曲を入手していたみたいなんですよ。」

「えーとつまりワクチンを造ったとしても10日未満といったところでしょうか？」

「『まさか音楽データからワクチンを造ったのか！？』木山が言っていたけど、なんの能力を持っていたらこういうことができるのかしらね？」

「それがですね【レベル0（無能力者）分類不明、備考AIM拡散力場の観測例無し】となっておりますね。」

「無能力者ってことは、純粹に技術みたいね。」

「初春、あなたはワクチンを造ることができますの？」

「無茶言わないでくださいよ！プログラミングはそんな簡単なものじゃないんですよ。」

「そうですわよね。」

うーんでも仮にワクチンを短時間で作れる人ならあんな簡単なプロテクトじゃ、おかしいような気が・・・ですがこういう能力ならあんなことが可能なんでしょう？御坂さんのように電気使い（エレクトロマスター）なわけありませんね。

書庫の情報に誤りがあるとは思えませんが、ただ運よく作れただけとか？・・・いやいやありえないでしょう、たまたま作れたとか天文学的数字どころの話じゃないですよ。

「こんにちはー、遊びに来ましたよー！」

「ここは遊びじゃないよ」

「わかってますって、おー初春なにしてんの？」

そうだ！佐天さんなら百日さんのことを何か知っていると
思います。ということで質問タイムです。

「ふっふっふ、佐天さん、今日は立場逆転ですよ。さあ、きりきり吐いてもらいますよ！」

「なに？」

「佐天さん！百日さんのことをどう思っていますか？」

「んゝ頼れるお兄ちゃんかな？宿題とか手伝ってくれるし、よく奢ってもらうからね！」

「…………はっ！だから難しい宿題が出ても余裕そうだったんですね。くっ、初春飾利一生の不覚です。あの問題の答えは、教えてもらったんですね。そうと知っていれば、私も百日さんに教えてもらい、あのときジャンボパフェを奢る必要はなかったわけですね。」

「佐天さん！百日さんのっ」「あっそうそう！今ももかちゃんね、入院してるんだよ。うぶぶっ、変な服もって大けがしたんだって！」「ええー！！大丈夫なんですかっ！？というか佐天さん笑ってる場合じゃないですよ！！！」

「いやいや、私も心配したんだよ？でもさ、いまのももかちゃん
は……あつはつはつは！」

佐天さんはしばらく笑い続けました。笑いが収まった佐天さんは、百日さんのことが知りたければ本人に聞けばいいと言って、入院中の病院へ案内してくれることになりました。

行くメンバーは佐天さんに私、御坂さんです。白井さんは、御坂さんが行くのを渋っていましたが、自分で百日さんに会うのも嫌なので、今回は来ないことになりました。

++++

七月二十八日、僕は左の肺の八割と心臓の半分、その内臓を包む肉を無くし、正しく死んだ。病院に搬送されるまでもなく、即死であった。

でも僕は目覚めた。そこは床に幾何学的な模様がある、大きな円柱状の水槽がある部屋だった。

『今はおはようといった方がいいね。おはよう、体の調子はどうだい？』

水槽の中には男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』

がいて、僕を見ていた。彼の言葉に従い、自分を見ていく。

傷一つない生前の僕の肉体。昔、大きな怪我をした古傷はそこにはなく、まっさらであった。悲しいことに局部を覆っていた体毛など、僕には一切の体毛がなくなっているようだ。

「頭とかがすーすーするくらいかな？あとは目が良くなってる。」

『ふふふ、似合っているよ。今の状況はわかるかい？』

今の状況……謎の部屋に謎の人物、病院のベッドの上にいる死んだはずの僕
……。

死ななかった？いや死んだ、100%。生き返った？傷一つなく古傷ごと治して？これもないわざわざ体毛を全部そる意味が分からない。なら――

「生まれた？」

『正確ではないが、生まれたというのは近い答えだ。その体は君のものではなく、君によく似たものだからね。簡単に言えばホームンクルスというものだよ。』

水槽の中の人は僕に丁寧に答えてくれる。しかし何の意図があって、僕をこの体に入れたのだろうか？嫌な予感がするね、能力を使うまでもなく。

「なぜ僕は生きている？」

『ふふふ、そう聞いてくるか。そうだね、仕事を頼まれてほしい。君の能力なら可能なものだ、仕事は追って伝えるよ。』

「分かった、それよりも聞きたいことがある。」

『いつてごらん』

僕が仕事を受けることは確定しているらしい、なら積年の疑問を晴らしておくことにする。折角、何でも知っていそうな人間がいるのだからね。疑問というのは僕自身のことだ、もっとも身近でもっとも知らないものそれが自分。

「僕の能力の詳細が知りたい。」

『君の能力は念動系のレベル0、君のAIM拡散力場は量子に影響するものだ、そしてその力非常に弱く観測しにくい。ただし、君の脳、つまり演算能力は桁外れに大きい。例えるなら人間大の樹形図ツリーダイアグラムの設計者。君は無意識の内に周りを全て演算し、理解している。だからわずかな力でも何らかの事象を引き起こすことができる。』

「ラプラスの魔……でもあれは原子はランダムに動くことで完全に否定されたてはずでは？」

『君の能力はあくまでも量子を動かすレベル、AIM拡散力場は常に君の周りの量子を規則正しく変化させている。なら君が意図的に能力を使ったならば、指向性を持った量子は君の演算した通りに動いていく、君の能力は起こり得る事象を確定させているのだよ。だが――』

「致命的なほど遅い・・・か、ありがとう大体わかったよ。」

『そうかなら君は死ぬ瞬間を見られている。生き延びたということにするならば、病院にしなければ怪しまれるだろう。』

「はいはい、おとなしく寝てますよ。」

バタフライエフェクト、極々小さな力がやがて大きな力になる力オス理論。つまり僕の量子を動かす能力が周りの量子に連鎖・巻き込んでやがて周りに大きな影響を与えているということになる。

すごい能力だけど、瞬発性にかけるね。なぜなら周りに影響を与えるには影響を与える過程が必要。逆説的に言うと僕は突発的出来事（知覚外の事象）に対応できないということになる。

『そうだ悪魔^{ラプラス}、あとで君のところに君の部下となる人物をよこそう。』

「ちよつと待った！？もう一回いつてくれ」

『君の部下と「そこじゃなくて!？」ああ、なるほど。これは君

のコードネームだよ。』

「コ、コードネーム？」

『ふふふ、7歳詳細な確率値を知ることができるようになる。13歳、確率が100%のことを運命と呼ぶ。^{フェイト}15歳量子論などを聞きかじり自身のことをラプラスの魔と呼称「分かった！？分かった、それでいいから！」ふふふ、君のことはよく知っているよ。』

「最悪だ……。」

自分の恥部をさらされ、すっかりへこんだ俺はベットに潜り込み、寝ることにする。

++++

ゴトツという音と一緒にベットが落ちた。どうやら僕がふてくされている間にエレポーターに運ばれたらしい、静かな病室、日は既に落ちていて消灯時間のようだ。

光がわずかしかないがこの部屋が白いことは確認できる。この病室には僕のほかにベットの住人がいるようだ。ベットについているプレートには名前が入っており、相手の名前が分かる。

【上条当麻】

本来区分けされるカーテンは閉まっておらず、彼の姿が見える。暗いがいつも不幸不幸いつている彼の顔が見え、多分また不幸な目にあつたのだろつなと考える。

「上条当麻か……。」

「どうした？アホな面をしているゾ」

いきなり近くから声が聞こえ背筋がぞくつとした。声のした方向に顔を向けると、暗がりには紛れるように人が立っていた。背の高い女がこちらを見つめていた。女の髪は短く、ベリーショートと呼ばれるあまりみない髪型で、すらつとした体系でありながらポリウムのあるものを持っていた。

簡単にいうとクール系な美人です。

「君は誰だ？」

「ふつ、アレイスターから聞いていると思うが今日から貴様の部下になった。ミサカ00000号だ、フルチューニング気軽に様をつけてくれていいんだぞ？」

「僕は百日、気軽にもちやんとでもよんでくれ。それでフルミ、なんでここにいるんだい？」

「フルチューニングミサカでフルミか、成程なかなかダゾ。もちろん、フルミはな。思い立ったらすぐ行動が信条なんダゾ、だからフルミの上司に会うなら早い方がいいと判断したんだゾ。」

「おお、適応がはやいな。それでだフルミ早速仕事だ、僕が事故当時所持していた服を探してきてくれ。」

「分かった探して着てくればいいんだナ。」

「ああ、頼んだ。報酬は何がいい？」

「もちゃんは太っ腹ダゾ、そうだなフルミがレベル5になれるように協力してくれ。」

レベル5？なんでだろうな、最初僕はフルミがいないことに全く気が付かなかった。同じ部屋にいたのに気配に全く気付けなかったことから、フルミはかなり強いことが分かる。

「いいぞ、でもなんでレベル5なんだ？」

「うむ、フルミは御坂美琴のクローンなんダゾ。フルミの0000号としての存在価値はレベル5ひいてはオリジナルを超えることなんダゾ。オリジナルを超えるにはまずレベル5に到達することが絶対条件なんダゾ。あと妹たちを殺している一方通行をぶん殴りたいんだゾ。」

「うん、フルミ。今度からは要点をまとめることいいね。」

「うむ、わかったゾ。それでは服を探してくることにする。」

フルミは音もなく、去って行った。明らかに堅気の人間の動きではないな……。いや僕も今日から堅気の人間じゃなくなっちゃったのか。

今日は疲れたな、もう寝よう。ああ、頭がスースーするなあ。

悪魔生誕（後書き）

フルミのスペック

ミサカボディ（肉体年齢20歳、肉体は調整済み。なかなかのも
のを持っている。D。筋繊維は強靱。）

ミサカフェイス（死んだ魚の目、こげ茶のベリーショートヘア。）
ミサカパワー（電気使いのレベル4、出力は5000万V。御坂
の能力の5%ほど、でも普通に強力）

フルミバズーカ（実態はレールガン、オリジナルに対抗しようと
不足分を道具で補った結果、バズーカ大の大きさになったため。御
坂の能力の3分の一程度の威力。）

ダゾ口調、作者の趣味

ある意味始まりとっていい話（前書き）

お久しぶりですね

これから出てくるオリキャラたちは

とても濃い人物にする予定なので気を付けてください

ある意味始まりとっていい話

【無能力者の集い】の一定時間だけ開かれてる会員用のスレにて

2 「4が入院したって本当？」

3 「ああ、間違いない。ただ原因は交通事故になっているが、実際は違うようだ。」

5 「3は物知りですな。1と6はどうしてるか分かりますかな？最近、此処にも来てないようですが……。」

3 「1はまたどこかの研究所に入ったようだ。6は知らないな、監視カメラをハックしても家から一步も出てないのは確かだ。たしか4が面倒を見てたと思うが……大丈夫なのか？」

4 「呼んだ？」

2 「あつ、4生きてたんだ。てつきりお亡くなりになったかと」

4 「死んだのは毛根、それよりあれ本当だったよ。6が言ってた、学園都市はなんらかのものに監視されてる説。」

5 「どうしたんですか？何かおありで？」

4 「あの窓のないビルの中に変な人がいてさ、その人が僕が言った独り言を知ってたんだよ。噂は本当かもしれないね。」

3 『滞空回線^{アンダーライン}か……もし本当なら流石学園といったところか。ということは今まで俺たちは見逃されていたということになるな。まあ別にこれと言って学園に害があるようなことはしていないからな。』

2 『3と5が研究所乗っ取ってんのは害があるんじゃないの？』

5 『はっはっは！ぬかしおるわ、研究所といってもロートルの集まり、私たちが有意義に使えるんですよ！』

3 『どちらも一理あるが、学園にとつては研究者であろうが俺たちであろうが関係ないんだろうな。それで4、一体お前はなんで怪我をしたんだ？』

4 『空から落ちてきた羽に触れたらボンって感じだね。ああそれと僕ね、ビルの中の人から雇われることになったから協力よろしくね。あと君たち外に出たら？』

2 3 5 『『絶対に嫌だ』』』

3 『ふつ、オレ達と4の仲だ。協力はしてやるさ、だからビルの人から研究資金を貰って来い』

5 『あとカワイイお手伝いさんも付いてきたら外に出ますよ。』

2 『お手伝いさんが付いてきたらあたしも研究所いく』

4 『ああ、分かった分かった。なんとかするから、カーテンくらい開けといてよ。』

3 『残念だが、此処には窓が無いのでな。ああ、そういえばジャッジメントの守護神^{ゴールキーパー}がこのサイトを探っていたぞ。噂通りの凄腕だな、遊びとはいえオレが作ったセキュリティは軽く抜かれてしまったよ。』

4 『へー、そうなんだ。』

5 『あまり気にしてないみたいですね。IP抜かれたんでしょう？直ぐにそちらにいくのでは？』

4 『えっ、別にばれても構わないし、それに僕たちのことを知ったとして何ができることはないよ。それに彼女はあの子の友達だしね、無下には扱わないさ。』

2 『へー、涙子ちゃんの友達なんだ……って女の子なの？カワイイの？まだ中学生なの？』

3 『2、落ち着け。どうせ俺たちは会うことが無いのだから、そんなに興奮するんじゃない。それで4、能力の調子はどうか？お前が生きているということは、能力が強くなったのではないのか？』

4 『そうだね。昔よりもはっきりと分かるよ。でも僕が生きているのは能力のお蔭じゃないよ。僕の能力が効かない因子が影響していると思うよ。例えば僕が死んだ時間は、七月二十八日の午前零時過ぎには何が起きていた？』

3 『ちよつと待つてろ……その時間は謎の光の柱に光る羽、そして人工衛星おりひめ一号の大破が観測されたか……この羽というのは4が死んだ直接の原因であり、柱の直

上には人工衛星があつた。』

2『それどこ情報よ』

3『学園ではなく大国のデータバンクからだ。』

5『私も見てきたのですが、どうやら3の言うとおり、謎の光の柱によつて人工衛星が大破したようです。ということは人工衛星に積まれていたツリーダイアグラムも一緒に破損しているとみていいでしょうね。』

2『それ・・・やっぱいな！あたし達も乗り遅れる前に祭りに参加しないと！』

4『勝手に盛り上がつてるところ悪いけど、僕は変な人に残骸の回収を頼まれたので手伝つてくれよ』

2『分かつてる分かつてる！折角のお祭りだもんね、いろいろ巻き込まないと！』

3『2、落ち着けまだ動くのは早いこついうのはまず様子を見てそれから引つ掻き回すのが面白いんだぞ。4、6に連絡を取つてくれ流れを作るぞ。』

5『1はどうします？』

4『一応知らせておくよ。それじゃね』

+ + + + +

私、佐天涙子の友人たちは少々変わっている。レベル1でありながらジャッジメントである初春飾利、レベル4のテレポーターでジャッジメントの白井黒子、学園に7人しかいないレベル5の御坂美琴、そして私のお兄ちゃん的な存在の百日ちゃんである。

百日ちゃんとの馴れ初めは前に初春からのろけ扱いされたので割愛するが、百日ちゃんは最初にあつたときから変な人だと感じていた。

今では慣れてしまったが明らかに不良の外見で丁寧喋ったり、医学書やらなんだかよく分からない英字？の本を読んでいて、ちぐはぐな感じがする。そんな人。

「佐天さんはなんで百日さんと一緒にいるの？黒子の言った通りならすっごい嫌な人みたいんだけど・・・。」

「ちよっ御坂さん！」

「うゝん、何でかって聞かれると好きなんだと思います。百日ちゃんのことか、」

初めて会ったあの日から足繁く百日ちゃんのもとを訪れることが多くなった私は必然的に相談に乗ってもらうようになった。その時、私は小学生で学園に入学して多くの人と一緒に夢破れていった時期だった。

だから私のために何かしてくれて親身に接してくれる百日ちゃんに惹かれちゃったのは。百日ちゃんは私の初恋の人で、尊敬できる無能力者で、兄のような存在。

「いろいろ相談に乗ってもらったり、助けて貰ったりしたんです。それから百日ちゃんは——」さ、佐天さん！そういえば百日さんってなんで怪我したんですか？」初春どしたの？」

「（ほら御坂さんも！佐天さんがのろけ始めたら日が暮れちゃいますよ！）」

「え、えーっと、そういえば聞いてなかったわよねー。」

「そうでしたっけ？……そういえばつるつるになったしか言ってませんでしたね。んーっと、どうも目撃者によると突然爆発したみたいで、本人はリア充だからってちゃんと教えてくれな感じです。だから今日こそ聞き出そうと思ってます。」

「……………」

さてと今回こそ聞き出さないとね！

「ふっふっふ、待ってる百日ちゃん洗いざらい吐かせてあげるから！」

「百日？」「

「へっ!？」

++++

「とうまーとうまー、おながが空いたんだよ!」

「インデックス・・・頼むから静かにしてくれよ・・・ほんとすみません!」

「いえいえ、子供は元気が一番ですよ。」

全治五日・・・・・・・・そう五日であの大ケガが治ってしまうそう
だ。久しぶりにこの学園都市の異常性を感じることができてうれ
しい。

しかしそれにしても同じ部屋患者である上条当麻・・・の連れの
インデックスという少女が騒がしい、毎日面会時間とともにやつ
てきて時間ぎりぎりまでいるので非常に・・・・・・・・あれ?学校と
かに行かなくていいのだろうか、ちょっと聞きだしてみるかな。

「インデックスちゃん」

「なに？御菓子くれるの？」

「うんごめんね。御菓子は無いんだ、でも手品を見せてあげる。」

「ほんとっ!？」

「じゃあ見ててね」

右手をそれっぽく動かし手前に持ってくる。インデックスの注意を右手に集めたところで、左手で五百円硬貨を取り出し、右手を素早く振る。インデックスの視線が泳ぐ、そのわずかな隙に硬貨を投げ入れ、あたかも最初から持っていたかのように右手をひらく。

「はい」

「うわっ！見た見た当麻！今、左手から右手にコインが移動したよー！」

「インデックス・・・おまえ・・・。」

「なに？」

「すごいね、インデックスちゃん。じゃあ次は分かるかな？」

興味津々でこちらを観察するインデックス、ちよつとやりにくく感じるが気にせず近くの間からガラスのコップを取り出す。

硬貨をテーブルに置き、その上でコップを動かす。そして硬貨の上にコップを置く……インデックスの反応は？

「……あれー？コイン消えちゃった……。」

「どうなってんだ？」

「どうかな」

「んーっと……あっそうか、そのコップに細工がしてあるんだよ。」

「どういうことなんだ？」

「もー当麻はこれだからだめなんだよ。いいあのコップの口の部分にテーブルと同じ白色の紙が貼ってあるんだよー！」

「うん正解、インデックスちゃんは鋭いね。そういえば服装的にインデックスちゃんはシスターなのかな？」

機嫌のよくなっているインデックスにちょっと質問してみる。得意げに手品のタネを言っているこの子はどうやら頭のいいバカという分類されるタイプだと思う。

だから上手くやれば色々聞けそうだ。

「そうなんだよー！」

「そうなんだ、じゃあ続きをしますか。この何の変哲のないゲーセンのメダル……これはね【悪魔のメダル】なんだ。断言するよ、裏しかでないよ。」

「くれるの？」

「うん、早速やってみたら？」

「……うん」

不思議そうな目でメダルを見つめるインデックス、なぜそんなに熱心に見ているのだろうか？

インデックスがえいっ！という掛け声を出しながらメダルを弾くと低い軌道を描きながら床に落ちていった。墜ちたメダルを確認したインデックスはメダルをいじりながら僕に「裏」といつてまたメダルを弾いた。

何回弾いても裏の出るメダルを見て首を傾げ、上条の隣に座りこんでしまった。

「………ねえ、当麻。当麻もやってみてよ」

「ん？いいけどこんなもん、よっ！……。」

「裏だよね」

「裏だな」

思ったよりもインデックスがメダルに食いついちゃったせいで質問がしづらくなっただな。まあ、僕の実力もある程度上条に通じるということが分かっただけ良しとしよう。

どうやら上条の能力はメダルに触れているときだけ効果あるみたいだね。

「魔術的力は感じないんだけど・・・それっ！」

「・・・。。。」

「当麻の右手でも解けなかったからこれはただの偶然なのかな？
・・・また裏だ」

なんで上条は冷や汗をかいているんだろう、なにかやましいことでもあるのかな？それとインデックスはメダルを凝視してるね。

さてそれにしても魔術的力とかなんとも香ばしいワードが出てきたね・・・ちょっと暇そうなやつに聞くかな。

——ぴりり

「あつもしもし4だけど、今いい？」

『・・・つと、ごめんごめん通話とか久しぶりでさ。それでなに

？」

「ちょっと面白そうなこと聞いたからさ、調べて貰おうとして・・・なんか廊下から聞き覚えのある声がしたんだけど。」

「気づいた？今入るけど変なことしてないよね。具体的に「そこにいる奴さっさと入って来い！」」

スライド式の病室の戸を開いたのは、少し前までネット上でやり取りしていた。

「やあ、すっかり男前だな。」

「お前はますます中性的になったね。」

「男の娘と呼んでくれ、だいたいあってるから」

2であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9342t/>

とある悪魔の確率変動【チャンスメイク】

2011年8月2日00時59分発行